

Title	埃及第十八王朝時代の宗教
Sub Title	
Author	恒松, 安夫(Tsunematsu Yasuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.1 (1924. 6) ,p.134(730)- 156(752)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240600-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

埃及第十八王朝

時代の宗教

一

現在此の世に行はれつゝ、ある様々な宗教は決して一朝一夕に起つたものではない。時代を遂ふて

その源に逆れば其處には必ず一貫せる發達の跡が存する。然も文明の程度未だ幼稚にして、人間の頭腦未だ單純なる古代に於ては、思想、生活様式特に宗教の發達、變化の速度は極めて遅々たるものである。此處には第十八王朝時代に行はれたる

宗教に就きて述べんとするも、決して此の時代に突然新なる宗教が埃及に産れたのではない。他に比較して甚だしく保守的なる埃及人の生活状態は極めて變化に乏しく、或る一時代を知ることによつて全時代を知り得ると云つても敢て過言ではない。其故此時代の宗教に關して述ぶるに先き立つて、先づ此の時代以前に存在せし宗教を概観する必要がある。

王朝前の時代より既に埃及人の思想に來世の觀念が存せしことは事實であるが、然し果して彼等が來世を以て永劫のものであると思惟したか否かは疑問であつて、少くとも來世が現世に類似したものである位に考へたことは事實と見做すことが出来る。下つて王朝時代の宗教は如何といふに頗

る困難なる問題であつて、或る人はこれを一神教的と見做し或る人は動物崇拜であると説くのであるが此の二説は孰れも否定することが出来ない。埃及にトーテムイズムが行はれてゐたか否かは、末だ學者間にトーテムイズム其のものに關する説が一致しない以上、これを決定することは出来ない。然しながらトーテムイズムを廣義に解釋するならばこれが埃及に於て行はれてゐたといふことが出来る。(註一)それは兎に角として何故前二説を否定することが出来ないかといふに王朝時代の宗教が結果に於ては多神教的形式を備えてゐるにしても埃及人の宗教的精神の動機となりしものは彼等の周圍を取巻く大自然の神秘的なる偉力に對する畏敬の念なるが故である。彼等は時に神を直接偉大なる自然現象に結びつけて現はし、其等の名稱を神の名となした。即ち天空を意味する語 *Nut* は女神「Nut」となり、土地を意味する語 *Geb* は「Geb」神となり、太陽を意味する語 *Ra* は「Ra」神となつた。又時は彼等は自然の現象と直接間接に關係を有する動物を以つて神となした。即ち *Fayum* に於ては鱷魚を神と崇めて *Sebek* と呼び、*Cataract* 地方に於ては羯羊を神 *Khnum* と呼び、^{デルタ}三角洲に於ては河馬を神 *Reh* と呼んだ。又同様な自然現象を超人間的なる力と結びつけてこれを人格化して表はした。宇宙を人格化することは比較的後の時代に行はれたのであつたが、これとても有史前にその根跡を認め得るのである。動物崇拜に於ては動物によつて神の性格を表さうとしたのであつ

て信仰の對象は決して動物そのものではなく、動物の型態をかりてその中に宿れる神靈其ものを拜したのであつた。それ故神を具象化したる動物によつて表現される神靈との區別は頗る早い時代即ちピラミッド時代以前より明かに存在してゐた。

一般に神觀の發達は極めて遅々たるものであつて、埃及人は先づ手近にあつて彼等に快樂を與ふるものを神となし、不快を與ふるものを惡魔とした。故に岩石（埃及に於ては岩石は珍奇なる品物であつた）、ナイル河、植物、樹木等の如き多くのものが神として崇拜されたのである。早き頃各地の都市は一個乃至數個の神を有し一個乃至數個の都市が合併するときは、其等の都市が有せし神も亦合併して何れか一つの神が残つてその都市の

神となつた。Copto. の神 Min が Thebe の神 Annon と合併して Anon が兩市合併後の Thebe の守護神となりし如きその一例である。埃及の統一が成立し、全國が數州に區分せらるゝに至つて州の勢力の消長に伴つてその州の守護神たる神の勢力も亦消長し、時としては在來の守護神が他の神に取替えられることがあつた。又ナイル河、土地、海洋、天體等の如き或は最も秀れたる或は重要な價值を有する、或は驚異に値するが如き自然界の諸現象は多く人間の型態を以て表現された。然しながら更に後世に至つて宇宙の偉力の化身として動物が用ひられる様になつた。即ち太陽の化身と見做されたる Memphis. の Hapi 神の如きはこれに屬するものである。原始人には概して共通の傾

向であるが、特に埃及人は神秘的なる自然の偉力
空氣が乾燥して居て空中に水蒸氣乏しきために
によつて彼等の宗教心を喚起せられし點多く、更
天體を眼近に眺むることを得し彼等は、太陽の直
射、月の盈虚、星の閃き等に對して、如何に深き
にかゝる宗教心は總ゆる藝術科學に對する原動力
感激を催せしことであらう。ナイルの沿岸に僅か
となつたのである。其故古代埃及に於ては大自然
に數哩、數十哩の幅を以つて走れる沃野に、樹木
と宗教と藝術科學とは密接なる關係を有した。古
は繁茂し穀物は實り、鳥獸は棲息し、平和なる人
代埃及人の驚畏の標たりしものにして、絶えず
間社會を形成してゐるに反し、一步この沃野を東
悠容たる流を繼續し沿岸の住民は勿論のこと總ゆ
西に出づれば、そこには際涯なき大砂漠があたか
る生きとし生けるものの生活持續に必要缺くべか
も死人の家の如く深き沈黙を守つて、遙か地平線
らざるナイル河は、單にこの事を以つてするも埃
の彼方にまでも廣がつてゐる。この異様にして一
及人の神仰の目標となるに充分であつたが、加ふ
種莊嚴なる對照は、何程か彼等の心に沃野の恩惠
るに彼等の眼には何等の前兆も映せずして毎年時
を痛感せしめしことであらう。故に此等は變じて
期を定めて奇蹟的に記る大茫濫が、狹猛なる埃及
神となりナイル河は Hapi の神、天空は Nut の
の平原殆ど全部を濁水に浸して仕舞ふことは何程
神、特に太陽は Ra 神、土地は Geb の神として
か彼等に取つて驚異すべき事柄であつたらう。

埃及人の深き信仰の目標となつたのである。彼等はナットを創造の母とし、ゲブをその夫として人格化したる神話を生むに至つた。埃及人の神話と彼等の自然觀とを對照して研究するは頗る興味あることである。

古王朝時代の宗教は自然禮拜、政治は專制の時代であつた。これに次いで暗黒時代と封建時代があり更に次いで隆々たる中王朝時代となつて文明は高潮に達し、個人道德は旺盛となり、従つて社會的勢力が勃興した。即ち太陽神ラアは、偉大なる自然神となつて自から創造せる世界の統一者と見做され、斯くて名實共に一致せる唯一神觀に向ふ一階段が作られた。オシリス、プタア、トート

に至つたのはこの頃である。されどラアには一個の強大なる競争者があつた。それは即ちオシリスにして、前者は所謂國神で官僧の信仰する所、後者は一般民間に勢力を有せしものであつた。斯の如く此の時代に民間の信仰を有する神が起るに至つたのは、一般に個人の自覺が發達し、彼等が來世に於てオシリスと蜜接なる關係を有するに至ると信するに至つたからである。即ちオシリス信仰が次第に旺盛に赴くに隨つて、來世に於ける彼等とオシリスとの關係に對する觀念は益々道德的傾向をとり、死者は現世に於て行ひたる行爲をオシリスのために裁ばかれるものと思ふに至つた。斯して現世を支配する神ラアと、死後の世界を支配する神オシリスとの信仰は相並んで行はれてゐる

し來りしものにして、古き贊美歌には彼が月神として天空を往來するものと見做されて居たし、又鷹の頭を有する彼の神像にも、彼が元月神であつたことを示してゐる。然るに後になつてこのアモン神は諸神の王となり、次第に月神としての性質を失ひ、終にヘリオポリスの太陽神と結合するに至つてからは、全々その神性に變化を來し、かくて彼は埃及の總ゆる神の神性を兼備する代表的偉神アモン・ラアとなつた。

太陽神の禮拜は埃及に於ては既に古王國時代に存在し、當時太陽神は「無限」を意味する語を以つて名付けられてゐた。太陽が無限の勢力を有し自然界の征服者であるといふ思想は古王國時代に既に存在してゐた宇宙觀と相關連して、埃及人の

生活と蜜接なる關係を有してゐたのである。されどこの太陽神觀は、古王國時代以後帝國時代に至るまでの間に於ては、單にナイル河の流域に限られたる所謂埃及本土を支配してゐるに過ぎなかつた。然るに帝國時代に入つてよりは就中ツトメヌ三世の時代に入つてより埃及の領域は南北に大擴張をなし、その範圍は見界狭き當時の埃及人に全世界と見做された。即ち埃及王國はこのとき眞に世界の端まり端に擴がれる軍國主義的世界王國の觀を呈してゐた。この事實に伴つて世界の涯より出て涯に没する太陽が、全世界を領有せる全埃及王國を支配してゐるといふ觀念が生じた。茲に於て太陽神アモン・ラアが軍神として國王の劍によつて征服せられたる土地を支配することとなり、

且つ唯一最高の國家神として神拜される様になり
はテーベに建立せられ莫大なる土地財産はアモン
ツトモーセ三世の如きは、アモン・ラアの領土を擴
のたために寄進せられた。斯の如く寺院の富は増加
めんがために自分はアシアの征服を行ふものであ
し、神の殿堂は莊大となり、諸種の儀式が復雜に
る、とまで記してゐる。この傾向を以つて唯一神
なるに及んで、僧侶は從來の如く俗人の兼職を許
教に入らんとする第一歩であるとする人があるが
し得ざるに至り、茲に僧侶階級なるものが生じた
それは事實としても、末だアメンホテツプ四世の
而して僧侶の數が増加するに従つて、その團體は
時代に至つてアトン神の地は絶対に他の神の存在
漸次政治的色彩を帶ぶ様になつた。且つ擴張を
を許さなかつた様な完全なる唯一神教ではなかつ
重ねたる各所の寺院は、その莫大なる財産を分轄
たのである。處理するためには、各種の職務を必要とした。ア

テーベ王家の勝利と領土の擴張とに伴つて埃及
ビドスの王室墓地に埋葬せられてある許多の者の
は莫大なる分捕品を戰場より齎らし、その富は代
中四分の三は僧侶であるといふによつても、如何
を重ねるに従つて益々増加した。歴代の王は此等
に僧侶團體が社會の有力なる一階級を構成してゐ
の夥しき富の使途を、アモン・ラアの信仰に向か
たかを知ることが出来るのである。此等の各團體
つて費消することとなり、堂々たるアモンの殿堂
の上に在りてこれを統卒してゐたアモン・ラアの

高僧は、政治上に於ても屢々最高の權力を掌握しなる懸隔が存せし以上、宗教上に於ても多少の相てゐた。ハツセプ、スツト女王の寵臣中最も有力なる人物たりしハプセネブはアモンの高僧で同時に帝國の宰相を兼攝し、且つ新しく統一せられたる全國僧侶團體の頭目であつた。而して斯る例は此以外に數多く存するのである。

三

アモン・テアは國家神として禮拜せられてゐたのであるがこの信仰が、後に至つてオシリス信仰の如く民衆の信仰となりしか否かを確實に判斷することが出来ない。何故ならば、吾人の研究資料となるべき埋葬寺院の建築物、或は墳墓の壁面に記刻してある記録等が、悉く國王を始めとして上流社會のもののみであるからである。上流社會と下層社會との生活様式、並に文明の程度に於て大なる懸隔が存せし以上、宗教上に於ても多少の相違は免れ得なかつたかも知れぬ。されどオシリス神仰が後に至つて貴族社會の有力なる信仰となりしを見れば、或はラア信仰が民衆の信仰となり得たかも知れない。

死骸の保存が重大視され、木乃伊の術が發達して來たのは王朝時代に入つてからである。この木乃伊の最も恐るべき敵と見倣されしものは、死者の靈が現世からオシリスの王國に赴く途上に於て襲ひ來る惡魔であつた。偉神ラアと雖もこれを恐れ、この惡魔より蒙る害を避けんがため、トートンの造りし呪文を唱えて身の安全をはかると信せら

れた。其故埃及人はての悪魔の襲撃より死者の靈までもない。此の書の研究に看手せし最初の埃及を救はんがためにトートの援助を租ることとなり學者は彼の有名なる Champollion であつて、彼が第四王朝時代にトートの靈感を受けて或る神學者此等を宗教關係の文書であると断定せし點は正鵠が作りしものと云ひ傳えられてゐる埋葬經を、一を得たが、埋葬の式典であると断定せし點は誤謬般に使用する様になつて來た。此れ即ち所謂死者の書である。であつた。蓋し彼の時代には未だ完全に象形文字を解讀し得ざりしたため、經文と並記しある挿畫よ

一體「死者の書」なる名稱はエル・レプシウス博士が、一八四二年チューリン博物館所藏のパピルスに記したる此の種の埋葬經を編纂して刊行せる角塔内の廊下や室や或は石造の墳墓内の壁面に記され、書の標題 Todtenbuch に起因せるものである。さ刻され或は棺の内外パピルスの卷物等に記され、れど埃及人はこれを死者の書とは呼ばずして「來ある。第十七王朝より第二十王朝に至る間に使用するべき日の書」(Per-Tem-Hin)と唱えてゐた。此等せられたる死者の書は、多くヒエラチック(象形の經文が埃及人の死に對する觀念や來世に關する文字の俗字)を以て記され、第十八王朝に至つて思想を研究する上に價値ある資料たることは云ふ死者の書はパピルスの卷物に記ることが一般の

習慣となり、棺の側面に記るす風習は跡を絶つた。

Theban Recension は約百九十章に亘るものであ

此の種の巻物がテーベの僧侶、貴族等の墳墓より
夥しく發見された。これを總稱して Theban Recen-

つて、その中には死者がこの經文を呪誦すれば如
何なる効果を奏するか、又これを呪誦しつゝある

sion と云ひ、其等は悉く第十八王朝より第二十一

問如何なる儀式を行ふべきか等の事柄を記せしも

王朝時代に屬するものである。其の早き時代に屬

のが含まれてゐる。この廣範なる經文の内容を列

するものは、黒インクの野の間に黒インクを以つ
て象型文字の聖字が豎に認められてあり、各章の

擧することは到底至艱なるが故に、茲には其の煩
を避くることとする。

標題、各節の頭字、式典等は赤インクを以つて認

古王朝時代以後、死體保存の目的のため木乃

められてある。第十八王朝の中頃各章に極彩色を

伊の方法を採用する様になつたことは前述せし處

施したる挿畫が用ひられる様になつた。斯る挿畫

であるが、何故埃及人が死體を保存する様になつ

は經文中の意味不明瞭なる部分に對して屢々説明

たかといふに、それは人間の肉體が靈魂の住家で

に役立つことがあるため、極めて重要な價值を

あつて、死によつて靈魂は一度肉體を出て死人の

有するものである。俗字を以つて認むる風習が起

王國即ちオシリスの膝下に至りて生活し、その靈

つたのは第二十王朝時代以後のことである。

魂が再び神の允許を得て人間世界に復歸する時、

再び元の肉體に宿るものと信じたからである。吾人はこの點に於て埃及の宗教が、他の宗教に於ける因果律、再生説、或は末世の信仰と稍々相似たる點を有することを知るのである。埃及人が木乃伊と共に種々雑多なる生活道具を埋葬したのは、死人が黄泉の國に於て營む生活を、現世の生活と同様なるものと考へたからである。第十二王朝のセソストリス四世の墳墓から發掘され、現在シカゴの Field Columbian 博物館に陳列してある巨大なる木造船は、死人が此の世からオシリスの王國に赴く途上の大海を横斷するためのものであつた。オシリスの王國は天惠なる樂土であつて、其處は「食物の野」或は「ヤール」の野」と呼ぶ沃野で、ナイル河沿岸の何處よりも穀物豊饒なる

ため、死人は此處では安全且つ富祐なる生活を營むことが出來ると考へられ、この幸福に惠まれたる土地に行つて種蒔、耕作、收獲等の勞役に服することが、死に就くものの最大の願望であつた。然るに富み奢れる第十八王朝時代の貴族共は、かゝる死後の勞役を嫌ふ様になり、これが代理をなさしめんがためにウシエブテイと稱えられたる小像を死體と合葬する様になつた。又この世に於ける不善の應報としてのオシリスの所罰を免れんがために、石を以つて造れるスカラブが盛んに使用される様になつた。このスカラブには「オオ、我が心よ、惡魔となりて我に向ふ事勿れ」と云ふ文句を以つて始まる呪文が記刻してある。このスカラブを木乃伊の心藏部の上に當る巻布の下に入れ

て埋葬する時には、やがて罪行ある死人の魂がオシリスの裁判庭に立つたとき、スカラブの沈黙によつてオシリスは證據となるべき罪惡を發見し得ず、如何に罪行ある者と雖もオシリスの處罰を免れ得と考へられた。中世キリスト教の教會が信者に贖罪符を賣りたるが如く此頃埃及の僧侶は「死者の書」中の呪文やオシリスの裁判によつて許されしものの喜びの言葉を認めしもの、或はオシリスの裁判の光景を描きたる繪圖を人々に販賣する様になつた。斯してオシリスの神話に於て見られし當初の美しき倫理想は次第に墮落し生前の罪科も斯る僧侶より購ひ得たる一種の免罪符によつて、何時たりとも來世に於ける赦免を購ひ得るものとなり來たつたのである。

第十八王朝時代の末期に及んで宗教界は墮落しアモンの僧侶は精神界に於ける勢力を増加すると共に、俗界に對して其の勢力を伸張し弊風益々旺んなりしたため、イクナトン王は敢然立ちてアモン信仰を撲滅し併せてアモンの僧侶の專横を懲らしめんと計り、アモン信仰に對抗してアトン信仰を樹立せんことを企てた。この所謂イクナトン王の宗教改革は假命表面上は失敗に終つたとしても、これが埃及の宗教界に齎らせし無形の結果は極めて重大なるものであつた。

四

イクナトン王以前の諸王が齎しく武人であつて外敵の征服。領土の擴張に大なる努力を拂ひしに

反し、彼は天性武人の素質を缺き、彼は造物主たるアモン神は抵抗し得ざる總ゆる暴動を平定すべものであつて、國王自身は決して自ら手を下すべきものでないと考へた。ヒクソスを撃退したるアモス並に大ツトメスの兩者の人格的價値と強大なる軍隊の上、彼の王室の權力が懸つてゐることを、神の因果律に關する僧侶の神話以上に嫌惡した。」(註三)

新舊西勢力の確執は、既に同王の時代から萌してゐたため、彼は専らこの兩勢力を調和し操縦し行くことに努めねばならなかつた。かゝる任務を果すには政治家的手腕を必要としたのであるが、彼は政治家にあらずして寧ろ思想家であつた。彼の母テイイと妻ネフェルテイイとは共に亞西亞

人であつて、この二人と、今一人彼の乳母の夫で彼の寵愛を蒙つてゐた僧侶エイエとは、一團となつて一派の勢力を形成するに至つた。彼の母と妻とは彼に對して勢力を振ひ、少くとも表面上は政治にも關與し、イクナトンが行ひたる事柄は悉くこの二人の方のかり出しものであつた。埃及が亞西亞に於ける領土を蠻人ヒツタイトの爲に失はんとしてゐた艱局に際して、勇敢にして且つ敏腕なる爲政者を必要とせしにも拘らず、この若年の國王は一人の僧侶と二人の婦人とを相手に國家の眞の要求を満すことが出来なかつた。蠻人を撃退するに必要な軍隊をナハリンに送る代りに彼は當時の時代思想に傾投し、僧侶の哲學的理論は亞西亞に於ける領土よりも彼にとつて重要なもので

あつた。

第十八王朝の世界帝國的大勢力は、國民生活の外形、風俗習慣、富、生産技術等に異常の影響を及ぼしたが同時に亦時代思想の上にも深刻なる影響を及ぼした。茲に云ふ時代思想は主として神學を云ふのであつて、現代の所謂時代思想とは範圍を異してゐる。亞西亞征服前に於てすら僧侶の神觀は非常なる發達を遂げてゐた。神の解釋は自然神話中の神の地位や力より暗示を受けた。メムフヒスの僧侶の神觀は主としてメムフヒスの技術プターの神話より産れた。プターはその昔から建築技工の神であつて、人々は建築の設計は工藝品の製作に關して彼に相談した。メンフヒスの僧侶の思想がプターに關する從來の神觀によつて滿され

なくなるに至つて、彼等は他に確實なる道を求めこれによつて漸次合理的な而して成る程度の拘束を有する哲學的世界觀に到達することを得た。プターの保護の下に壯麗なる肖像や寺院の備品供物等を製作するメンフヒス寺院の工場は、一個の世界と見做される様になり、その頭目たるプターは宇宙なる一大工場の技師長となつて來た。以前プターが建築家や工匠に様々な設計圖等を與へてゐたと同様に、今や彼は全人類に彼等が欲する生活様式を與ふる様になつた。茲に於てプターは最高の神となり總ゆる精神總ゆる事象は悉く彼より出づるものと見做さるゝに至つた。宇宙と其中に存在する總ゆるものごが彼の思想に従つて存在し、建築工藝品に對する彼の設計と同様に、彼

の思想を更に具體的なる言葉を以つて表現する必要が生じた。プターの僧侶は神も人類も齎しくプターの心より生れ、彼等のなす總ゆる事柄は彼等の中に働くプターの心に過ぎないといふ意味を詩によつて表はした。(註四)

かゝる思想は單に僧侶の間のみ存せしものではなかつた。埃及人は斯して全感情的存在の中に神と共に自己を統禦する智識を得た。この智識は計劃を遂行する有力なる力、即ち神(プター)の言葉で、この原始的な「自我」は埃及に根源を見出すことの出来るロゴス教義の萌芽をなしてゐるものである。

これと同様なる思想が埃及の主なる神に關して傳えられてゐた。然しながら王國がナイル河流域

に限定されてゐる間は諸神の世界もこの範圍内に限られて居たが、帝國時代に入つて王領は一躍大擴張を遂げ、神の領域も亦擴大した。國王も僧侶も世界を神のみに屬するものであつて、征服は神の領土を廣むるために行ふものと考へてゐた。世界

の端より端に至るまでの諸國が埃及王室に朝貢してゐた當時の状態に在りては、宇宙的なる神觀が埃及に生れたるも亦當然である。神學と國王の勢とを比考することが旺んに行はれた。何故なれば神話作時代に於てはナイルの流域を統治するファラオが神であると思はれてゐたが、世界帝國を支配するファラオの下に生活する帝國時代の僧侶

の前には明白なる世界及世界觀が存在し、更に世界神觀の必要が生じて來た。征服し、統一し、統

治すること二百年、ファラオの治むる世界から僧
ト神の信仰が漸次頭擡し。イクナトン王の代に
侶等は次第に世界神を見る様になつた。この世界
至つて従來のアモンの地位は全くアトンのために
神は單一なる名稱を有せしには非ずして、メンフ
奪はれてしまつた。イクナトン王は太陽の實體は
ヒスの僧侶はその都の神プターを世界神となし、
決して神の權化ではなく、却つて太陽の熱こそ神
テーベの僧侶はアモンを、ヘリオポリスの僧侶は
の權化であつて、太陽の象徴は光線を發散しつゝ
ラアを以つてした。又地方の廟社に祀られたる得
ある日輪で、各光線の先端には生命を象徴する手
體知れざる神もその僧侶によつて總ゆる神を代表
が附着してゐると考へた。彼はこの新しき太陽の
する世界神と見做された。此等地方の僧侶は彼等
認識に對して「アトン」なる名稱を附し、公の場所
の祀れる神を以つてラアと等しき權利を有すべき
よりアモン其他の舊神の名を悉く削除し、自身の
ものであると信じた。されど歴史的に見れば眞に
名前もアモンホテップ四世を廢してイクナトンと
世界神たる資格を有する者はラアであつて、アモ
改めた。彼には最初斯くの如く徹底したる改革を
ンと雖もラアをしのぐことは出来なかつた。
斷行せんとする意志はなかつた様であるが大勢に
然るにアメンホテップ三世の時代に太陽の名稱
歴されて豫期以上の結果を齎らすに至つた。舊都
アトンが、特殊の意味に用ひられる様になり、ア
テーベに於けるアモンの僧侶を始めとして他の諸

神の僧侶團體よりの壓迫甚だしかりしと見え、彼は終にテーベより三百哩北方に當る地（現在のテ
ル・エル・アマルナ）に遷都し其地にアトンの寺院
を建立した。

イクナトン王はアトンの神が永遠の中より現は
れて全世界を創造せしものであると説き、この永
世不死なる神との精神的交通を奨励し、真理の悟
得を力説した。斯して彼は舊來の傳統的保守主義
を斥け、新しき教義を廣めた。この急激なる改革
の及ぼしたる影響は同時代の藝術の上にも明白に
表はれてゐる。即ちこの時代の藝術は傳統の絆を
超えて美に對する愛を自由奔放なる方法によつて
表現してゐる。

イクナトンは即位勿々寺院建築其他に必要な

石材を得るために、シルシレーの砂岩石切掘場に
人夫を遣し、宮中の上席貴族をしてこれが監督に
任じた、父王アメンホテップ三世がカルナクとル
クソルとの間に設けたるアモンの庭園に、彼は新

に廣大にして莊なる寺院を建立し、採色したる浮
彫を以つて裝飾した、彼は當初舊來の諸神の存在
に對して默認の態度を持せしにも拘らずアモンの
僧侶等の中に新しく見慣れぬ神が頭擡し來り、從
來アモンの殿堂を裝飾するために使用せられたる
富が侵入者アトンのために橋奪せらるるを憤ると
共に、美望の眼を以つてこれを眺めた。先王時代
にはアモンの一高僧は大藏大臣の職に在り、他の
一人は總理大臣に任せられた。斯くの如くアモン
の僧侶等が政治上に大勢力を掌握してゐたことは

アモン信仰の束縛より逃れんと欲してゐた若年の王にとりて大なる苦痛であつた。イクナトンは勿論アトンの僧侶を大臣に任命したが、アモンの僧侶等は依然として富裕にして有力なる一團をなし、機會だに到來せば彼等にとりて異端者たるこの王を排斥し得る程度の實力を供えてゐた。されど王がアモン僧侶等のために排斥され得なかつたのは、王が王家の正統に屬せしためと、アモン神の排斥に對してメンフヒス並にヘイリオポリス等の僧侶の後援を有せしためであつた。從來大勢力を有せしアモンの僧侶を頭となせし舊神の僧侶團體と、長い間不遇の地位に在りしアトンの僧侶との確執は極めて激甚なるものであつた。この激烈なる抗爭は、王をしてテーベに居るに堪えざらし

め、新寺院の建立を終るや否や突然遷都の意を決した。これより彼の極端なるアモン神其他在來の諸神に對する排斥運動起り、最早一步も呵責することなくアモンの名稱を悉く視界の外に葬らんと努めた。彼はこの點に關しては假令父王の肖像たりとも決して容赦することなく、アモンの名稱を總ゆる記念物上より削り取つてしまつた、加之彼は神なる語すら目に觸るゝを好まず、テーベに在る記念物或は寺院よりこれを探求して削除してしまつた。

斯くして新國家神アトンは完全に最高の地位を贏ち得た。埃及の本土は云ふに及ばずシリア、ヌビアに夫々王立寺院が建立せられた。

イクナトンはアトンを信仰する意味を含める讚

美歌を作つたそ（註五）の讚美歌は吾人に様々な事柄を説明してゐる。古代の讚美歌に在り勝ちなる多神教又は神人同形の思想の根跡は全然存在してゐない。毎朝天空に登り、毎夕地平線下に沈み行く太陽の神秘的なる光景や亦萬物の遁還を司配する太陽の偉大なる力は、この讚歌の主要なる要素となつてゐる。又この中には帝國の宇宙主義も完全に現はれて居る。彼は造物主に關する觀念を把むことを得、この讚歌によりて王は造物に對する造物主の慈悲深き目的を啓示してゐる。彼がこ

参照

（註一） Allen Menzies:—History of Religion. P. 137

の中にシリア、ヌビカを詠み入れてゐることは右に述べし如き寛大なる心意より出たるものである

in Egypt.

（註三） Schneider:—Kultur und Denken der alten

國家神を戰爭の神とし、單にファラオの征服を助

Aegypter P, 512

(註四) 偉大なるプターは神の心なり言葉なり。プター。彼より

心の力言葉の力は出づるなり。

總ての人の口より出で來るなり。

總ての神總ての人總ての家畜混生くるもの考ふるもの

考ふるものを指揮するものそは彼(プター)の欲するものなり。

そは(心)絶えず湧き出づる總てのものを齎らすものなり。

思想を繰り返すものは言葉なり。

總ての神を造るものは心なり……。

總ての神の言葉が思想によりて存在し言葉によりて存在する時に。

(朝) 汝は天界に美しく現はる

男々しきアントよ。生の始めよ、

汝は東の空に昇り、

汝は汝の美をもて地上を隅なく充たす。

汝は實に美しく輝やかしく揚々として地上に昇る。

汝の光は汝が造りし全土を包む

汝は太陽なり汝は地の端々に沈む汝は汝の愛もて地を包む

(晝) 汝は天界に美しく現はる

男々しきアントよ。生の始めよ、

汝は東の空に昇り、

汝は汝の美をもて地上を隅なく充たす。

汝は實に美しく輝やかしく揚々として地上に昇る。

汝の光は汝が造りし全土を包む

汝は太陽なり汝は地の端々に沈む汝は汝の愛もて地を包む

(夜) 汝は天界の西に沈み地は死人の如く暗し。

汝等は家に寝れ彼等の頭上は蔽はる。

彼等の息は閉ぢ目は互に見えずなる。

(人) 彼等は家に寝れ彼等の頭上は蔽はる。

彼等の息は閉ぢ目は互に見えずなる。

總ゆるものが盜まれる。彼等の頭の下に在るものすら。

然も彼等は何事も知らずしてゐる。

(獸) 獅子は穴より出で來り

蛇は咬みつく

夜は夜の光に輝く。地は靜かに横はる。

そはこれを作りしもの地下に在ればなり。

地は輝けり。そは汝地上に起り上り眞晝の中にアントの如く光ればなり。

暗闇は去れり。そは汝汝の光を與へ兩地(上下兩王國)に日毎これを享受すればなり。

人々は目覺めて起ち上る。汝は彼等を照らせばなり。

彼等は體を清めて衣を纏ふ

彼等は汝の上るを喜びて手を擧げ

彼等は至る所地上に己が仕事につけり。

家畜は静げく草木繁れる牧場に在り馬は己が住居に飛び交ふ

彼等の翼は汝の「カア」を賞めたたふ鳥の群は彼等の足もて飛び交ふ

小鳥は汝が彼等を照らす所に居る。

船は北へ南へと往き交ふ。汝の昇る所に道開くればなり。

河の魚は汝をたゞえて泳ぎ廻る。

汝の光は大海の底にも及ぶ

汝は女の體に受胎をなさしめ人類の發生をなす

汝は子供を母の體內に生かしむ

汝は彼等を安靜にしてなげかざらしむ體內にて養ひ育て大人になりて必要なる精神を興ふ

彼等生れ出づるや汝彼等の口を開き彼等の欲することを汝なし興ふ。

卵の中の小鳥は殻の中でないてゐる。

汝はこれに卵の中にて呼吸せしめ、汝の造りしものに生命を興ふ。生命は集りて卵を破り出づ

卵あり出で來らば彼等は懸命に嚙づり、足もて走れり。

實に實に汝の造りしものゝ多きことよ。

汝は汝たゞ一人の意思により地を造りこれに人獸鳥を興

むたり。

地の面の總ては足もて歩み

空の總ては翼もて飛ぶ。

シリヤよりクシユに至る丘の上に或はまに埃及の野に汝は總てのものに場所を興む彼等の生活を工夫す。

總てのものは己のものもち

日の長さを數ふ。

彼等の言葉は様々なり、彼等の性賣も皮膚の色と共に異なる。

分割者の如く汝は見知らぬ人々を分かつ。

汝ナイルの河を地下に造りし時汝は汝の心より人の住居となさんせり。あだかも汝は汝自身のために彼等を造れり。

彼は弱きものゝ中に在りても彼等の主たり。

おゝ、彼等のために登る地上の主よ。

遠き地に於ても恐れらる日の子、汝は彼等の生命を造り出せり。

汝は彼等に雨を降らざんためにナイルの河を天におけりそは大海の如く丘の上に雨を降らし、彼等の市の間に在る野に水注ぐ。

實に秀れたる汝の行ひよ。

お、永遠の主よ、天上のナイル河は彼等の足もて歩む見知らぬ人とあらゆる獸のためであり。

地下より来るナイルの河は埃及の國土のためでありて、そは畑を悉く培ふ。

汝は輝き彼等は汝によりて生く。

汝は汝のあらゆる仕事をなさんために四季を設けたり。

冬は彼等を寒からしめ夏は暑からしむ汝は天を遙か彼方に遠ざからしむ、そは汝が空に登らんためなり。そは汝一人なりしとき造りし總てのものを見んためなり。

揚々たるアトンの如く姿を表はし遠方を照らして還る。村も町も部族も道も河も。

總ての眼は彼等の前なる汝を見る。

汝は余の胸底に在り。そこには

汝の子ネフェル・ケプル・ラ・ウア・エン・ラア。のはか誰も知るものなし。

汝は彼等をして汝の行ひ汝の力を理解せしめたり。上地は汝の掌中に在り、汝沈まば彼等は死す。そは彼等汝によりて生き彼等は汝が沈む迄汝のすぐれたるを見つむればなり。

彼等は汝が西に沈むとき悉く仕事を止む。

而して汝登らば彼等はまた始む……

汝池の基を定めし日以後汝は汝自身より出し汝の子のために汝等を蘇らしむ真理に生くる偉大なる埃及王イクナトンよ。

偉大なる皇后惠まれたる兩土の皇妃 ネフェル・ネフェルウ・アトンよ

ネフェルティティ永遠に生き永らへて榮へよ。
(Petrie の英譯より重譯す)

恒松安夫